台大日本語文研究第 17 期
2009 年 6 月，頁 85-114
2009- 2-23 收稿，2009-4-27 通過刊登

關於台日國際婚姻子女日語會話用語之考察

服部美貴*

摘要

本研究以 10 名在台灣接受教育的台日國際婚姻子女爲對象， 將焦點置於 OBC 訪談資料中所出現的誤用，針對其特徵加以考察。

根據分析結果得知：雖未見雙語之間的混用及流動性，但在文法面發現許多助詞與動詞及助動詞的誤用。即使單句方面對答如流，然而一旦成爲複句，構造面的錯誤便相當顯著。再者，關於研究對象在日常生活當中較少經驗之言語行動，整體來說，發現「語彙不足」、「不習慣敬語等言語使用」之特徵。中文之干涉現象，除單字之外尚發現了：因動詞意義使用範圍不同而產生之日語誤用。

關於誤用與年齡之間的關係，誤用並未隨著年齡增長而減少。然而，有鑑於「發話內容隨年齡增長而愈發詳盡豐富」一點，並無法單純地將分析資料中之誤用數量與日語能力來作連結。

在日語誤用的種類當中個人差異性相當大，筆者認爲：「日常的日語使用（因環境與性格而有所不同）所造成的影響」也爲數不少。

關鍵詞：中日雙語使用者、台日國際婚姻子女、OBC、日語誤用

* 台灣大學日本語文學系講師

A Study of Oral Japanese of Children of Japanese-Taiwanese International Married Couples

Hattori, Miki*

Abstract

This paper is intended as an investigation of characteristic of errors in oral Japanese of ten Japanese-Chinese bilingual children whose parents are Japanese-Taiwanese international married couples.

OBC is used to collect data and the result shows that most of the grammatical errors are use of particles, verbs, auxiliary verbs, and making complex sentences.

Some tasks which informants rarely experience in their daily life seem to be quite hard to achieve.

Interference of Chinese are found both in nouns and verbs, most of which are caused by difference of range of meaning between Japanese and Chinese.

As a whole, errors made in their oral Japanese are dependent on person, and understanding of each child's language proficiency as well as their personality and lifestyle environment is needed to support their acquisition of Japanese.

Keywords: Japanese-Chinese bilingual, children of Japanese-Taiwanese international married couple, OBC, errors in oral Japanese

* Lecturer of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

日台国際児の日本語の話し言葉に関する一考察

服部美貴*

要旨

本稿では、台湾の学校教育を受けている日台国際児 10 名を対象に行った OBC データを使用し、日中バイリンガルの日本語の話し言葉の特徴について考察を行った。

文法面では助詞と動詞及び助動詞の誤りが多かった。

複文の構造上の誤りが目立つ他、伝言等の対象者が普段あまり経験しないタスクについては語彙の不足や敬語の使用など不慣れな点が対象者全般に見られた。

中国語の干渉は、名詞と動詞に見られ、意味的使用範囲の違いから生じる誤りが多いことがわかった。

年齢が高くなれば誤用が減るというものではなかった。しかし、年齢に合わせてその発話内容がより詳しく豊かであったことを鑑みると、単純に誤りの数と日本語能力を結びつけることはできない。

日本語の誤りの種類や頻度には個人差が大きく、環境と性格による普段の日本語使用の影響も少なくないと思われる。

先行研究でもいわれているように、子どもをバイリンガルに育てる絶対的な方法はなく、それぞれの個性や言語生活に合わせた日本語習得の手助けを行うことが重要である。

キーワード：中日バイリンガル、日台国際児、OBC、日本語の誤り

* 台湾大学日本語文学系講師

日台国際児の日本語の話し言葉に関する一考察

服部美貴

一、はじめに

台湾では、近年台湾人の配偶者として台湾に居留する外国人が増える傾向にある。中国大陸出身者を除くと、日本人配偶者の数は、男性はタイとアメリカに次ぐ 3 番目、女性はベトナム、インドネシア、タイ、フィリピンに次いで 5 番目に多い[1]。

台湾人男性と日本人女性の日台国際結婚においては、近年台湾と日本以外のアメリカやカナダなど英語圏の第三国で知り合って結婚に至るケースが増えている。竹下（2004）の調査によると、調査対象者である 184 名の台湾在住の日本人妻のうち、知り合った場所を結婚した時期によって分けると、1971 年以前は日本で知り合って結婚に至った夫婦が 8 割以上を占めていたが、1987 年以降はその割合は 5 割弱になり、1996 年以降になるとアメリカやカナダなどの英語圏で知り合ったケースが 37%と最も多くなっている（竹下, 2004:43）。こうした変化に伴い、台湾人の夫が日本語を理解しない日台婚姻家庭の割合も多くなっているとも言えるだろう。

また、父親が台湾人の国際結婚家庭の場合は日本人学校ではなく台湾の学校に子どもを通わせることが多い傾向がある。それでも子どもと自分の現在と将来を考えて、子どもに日本語を習得させたいと望んでいる日本人の母親は少なくない。

台北では、台湾人男性と結婚し子どもを台湾の小学校に通わせている日本人の母親が、自分たちの子どもへの日本語教育を行う場として、2001 年に「台北日本語授業校（以下、「授業校」[2]）」を立ち

[1] 内政部入出國及移民署全球資訊網＞統計資料＞臺灣地區外籍配偶居留統計（按國籍及區域分民國 97 年 11 月移民事務組）http://www.immigration.gov.tw/aspcode/9711/臺灣地區外籍配偶居留統計（按國籍及區域分）.doc

[2] 設立当初の名称は「台北日本語補習班」であった。これまでの経緯や活動については服部美貴（2008）「台北日本語授業校の 7 年の歩み」『MHB 研究会 2008 年度大会バイリテラル・バイカルチャーの育成を目指して－実践と課題－』

上げた。ここで毎週土曜日の二時間、日台国際児を中心とした幼児から中学生までの約 100 名の子どもたちが、自分の学年に応じた教科書を使用して日本の「国語」を勉強している。授業校は非営利組織であるため、運営はすべて保護者を中心とするボランティアによって行われている。

筆者は、2005 年 2 月からの娘の授業校への参加と同時に、保護者として授業校の運営に関わるようになった。それと平行して、主に娘の在籍するクラスについて学習場面や授業後の遊びの場面の参与観察を行っている。

幼児期や小学校に入学して間もない子どもを持つ親の中には、周囲の人から「小さい時に二言語（或いはそれ以上）に接していると子どもが混乱するのではないか。」と言われたり、子どもの話す日本語の誤用に接したりすると、幼少時の二言語併用は子どもの言語習得に悪影響を及ぼすのではないかと案じる人も少なくない。

服部（2005）は、授業校に在籍する幼児からと中学生の子どもを持つ日本人の母親 15 名を対象に、子どもたちの日本語習得のためのリソースや学習上の問題点などについてインタビューを行った。この時対象となった子どもは 31 名である。その中で、子どもの日本語習得で気になる点については、多い回答から順に①語彙・表現力不足②読み書き能力不足③日中漢字の混用④男の子が女性言葉を使用⑤敬語の使用⑥母の日本の実家の方言の影響⑦中国語の干渉に分類された。これらのうち、①は子どもの学年を問わず全体的に多く、②は小学高学年から中学生、③は小学低学年、⑤は小学中学年の親の回答が多かった。

興味深いのは、外国語学習において、文法上の誤りは教師や学習者本人にとって最も気になる点の一つであろうが、この時の回答では文法に関する問題点は誰からも挙げられていなかったことである。生まれたときから二言語を併用しているバイリンガルの子どもたちの日本語には文法上の誤りはないのだろうか。しかし、実際には授

http://www.mhb.jp/2008/07/2008_1.html を参照のこと。

業校の子どもたちの書き言葉や話し言葉にはやはり文法上の誤りもしばしば観察されている。こうした誤りは学年が上がるにつれてなくなっていくものであろうか。或いは定着しやすい誤りはあるのだろうか。

このような興味から、筆者は台湾在住の日中バイリンガルの日台国際児の実際の日本語使用には具体的にどのような傾向があるのかを探るため、異なる年齢の子どもたちの言語データを収集している。それらを通して、バイリンガル日台国際児の日本語の話し言葉における特徴を見出したいと考えている。誤りは年齢要因と関わるのか。日台国際児に特徴的な誤りはあるのだろうか。これらの点について検討していきたい。

二、先行研究

（一）年少者のバイリンガル研究

これまでの日本語に関わるバイリンガル研究は、英語との二言語習得研究が多くを占めており（山本, 1996:50）、日中二言語の併用についての研究は少ない（李, 2006:2）。

日本在住で両親の母語を日本語と英語とする国際児の英語習得に関する Yamamoto（2001）の研究では、英語を使って教える学校（アメリカンスクールやインターナショナルスクール、海外の学校など）で学び、兄弟姉妹がいない子どもの場合に、日本での非主流言語である英語習得が促進されやすいということであった（Yamamoto, 2001:127）。また、居住社会における当該言語への社会的評価を非主流言語の習得に関わる要因の一つとして挙げているが、英語ができることやバイリンガルであることが高く評価されている日本においてでさえ子どもをバイリンガルに育てることは難しいという状況を鑑みると、他の言語の習得は更に困難なのではないかと指摘している（Yamamoto, 2001:129）。

年少者の日本語教育にはさまざまな形態がある。中島他（2000:1）ではこれを「母語補強のための日本語教育（Japanese as a Native

Language 以下、「JNL」)」「親・祖先の母語継承のための日本語教育（Japanese as a Heritage Language 以下、「JHL」)」「第二言語としての日本語教育（Japanese as a Second Language 以下、「JSL」)」「外国語としての日本語教育（Japanese as a Foreign Language 以下、「JFL」)」の 4 つに大別している。台湾に居住する日台婚姻家庭の国際児の日本語教育は、このうち JHL に分類される。この JHL の会話力の特徴として、

(a) JHL は二言語間に流動性があり、日本語でうまく表現できないと、現地語に切り替える。

(b) JHL のように家庭をベースとしたコミュニケーションは短略的になりがちである。最小限の言葉で意志伝達ができるように「単語レベルの応答」「未完成文」の使用が多い。(中略) JHL の場合は、JSL の単語レベルとは異質のもので、表出的には単語レベルであっても、実際には「文レベル (中級)」「段落レベル(上級)」の実力を持っている場合が多い。

(c) 家庭ベースの会話は日常茶飯事の範囲の会話はスムーズであるが、概念的、抽象的トピックになると、語彙が不足し、段落がまとまらないことが多い。また、一見流暢に話しているようでも、助詞の脱落、L2 との干渉、文体の不一致などの問題を抱えている。

(d) 二言語環境で育つ子どもの場合、例えば「Sunday に subway で meet する？」のように二言語を混用する習慣がついている場合がある。

が挙げられている（中島他, 2000:11)。

李（2006）は、年少者の日中二言語習得に関する数少ない研究の一つである。李は日本に滞在している両親のどちらか或いは二人が台湾人で、日中二言語によるイマージョン教育を行っている学校に通う子どもたちの日中二言語能力を語彙、文法、読解の面から縦断的に測定し、それらの能力と年齢的要因、環境・心理的要因との関連について考察している。

年齢的要因に関しては、敏感期（11 歳以降）以降に来日した子どもが二言語の習得と保持がしやすく、環境・心理的要因については「学習意欲」「進路」「日常生活での二言語接触頻度や交友関係」に関連すると述べられている。

また、文法面においては、二言語に共通の部分は習得しやすく、共通ではない部分は「語順」を除き、困難であるとしている。中国語では「声調」「動詞」「成語」で、日本語では「助詞」「動詞」「敬語」「助動詞」「機能語（語尾変化）」がこれにあたる。（李, 2006:70）

これらの先行研究を踏まえ、実際の国際児の発話にはどのような傾向があるのか、具体的には中島他（2000）で指摘されている特徴に合致するのか、本稿で検討していきたい。

（二）OBC について

Oral proficiency interview for Bilingual Children（以下、「OBC」）とは、中島他（2000）によって開発された、バイリンガルの子どもの会話能力を測定するインタビューである。

子どものことばは、まず会話力が発達、それを土台にして読解力、そしてそれらを踏まえてメタ言語認知力が発達する。二言語とも発達過程にある子どもの会話力は「場面支援度」「言語知識必要度」「認知力の必要度」の 3 つの軸で捉えることができる（中島他, 2000: 9）。

「場面支援度」とは、どのぐらい場面の助けがあるかということで、場面の助けがあればあるほど学習が容易になり習得が早い。「言語知識必要度」とは、どのぐらい言語知識が必要かということで、学習が進むにつれ、言語知識が増し、込み入った会話も可能になる。「認知力の必要度」は、身近な日常生活の会話は高度の認知力を必要としないが、抽象的な内容について説明したり、意見を述べたりするとなると高度の認知力を必要とするというものである。

OBC は導入会話とウオーミングアップの後、「基礎タスク」「対話タスク」「認知タスク」の 3 つのタスクにより構成されている。それぞれのタスクでは状況が理解しやすいように絵カードを使用する。

また、学習者のレベルや状態に合わせて、タスクを変更したり省

略したりすることがある。

これらの 3 つのタスクについて説明を加える

①基礎タスク

文法中心の聞く力、応答する力を見るものである。

例えば、「スポーツ」カードを使って、「(スポーツの名前) ができますか。」{可能}、「どんなスポーツが好きですか。」{好き嫌い}、「(スポーツの名前) をしたことがありますか。」{過去の経験}、「○○と△△とどっちが好きですか。」{比較} などの表現に関する理解度をチェックすることができる。

②対話タスク

1 対 1 の対人関係において、どれぐらい会話がこなせるかをロールプレイを通して見るものである。どのぐらい日本語でいろいろな機能をこなすことができるか、どのぐらい積極的に会話に参加し、与えられたタスクがスムーズに達成できるかなどが焦点となる。

ロールプレイには、親しい友達との会話、教師との会話、家族の一員との会話、見知らぬ大人との会話などが含まれていて、場面は、学校生活、家庭生活、社会生活場面が設定されている。具体的には「友達を誕生日会に誘う」「親にほしいものをねだる」「電話の伝言をする」などのタスクがある。

③認知タスク

場面から離れて、どれぐらいの認知力や思考力を使ってことばが使えるか、また内容に見合った語彙を選択し、まとまりのある話ができるかを見るものである。「お話をする」「地震」「公害」などのタスクがある。

三、目的と調査内容

(一) 目的

第二章で述べたように、日英バイリンガルを中心としたバイリンガリズムの先行研究では、幼児期の二言語習得、二言語習得に関わ

る要因、コードスイッチングやアイデンティティに関わる研究が多くを占めており、学齢期に達しているバイリンガルの子どもたちが具体的にどのような日本語を使用しているのかという点にはあまり着目されてこなかった。

これらのことから、台湾の学校教育を受けている日台国際児の日本語習得の実態をより具体的に探ることは大変意義深いと筆者は考えている。

本稿では、台湾在住の日中バイリンガルの日台国際児を対象に実施した日中二言語の OBC データを使用して、中島他（2000）の指摘する（a）二言語間の流動性、（b）最小限の言葉での意志伝達、（c）トピックによる正確度の違い、（d）二言語の混用というような JHL の特徴はあるのか、また、日本語と中国語のバイリンガル児に特徴的な誤りはあるのか、そうした特徴には年齢による違いがあるのかについて考察を行うことを目的とする。

（二）調査内容

①実施時期

2006 年 2 月から 3 月にかけて行った。対象者の時間的負担を少なくするため、二言語とも同じ日にインタビューをした。

所要時間は一人一言語あたり 20 分から 25 分であった。

②対象

台湾人の父親と日本人の母親を持ち、台湾の学校に通っている日台国際児 10 名（男女各 5 名）を対象とした。表 1 に対象者の属性を年齢の高い順に示す。

表 1　対象者の属性

対象者	性別	台湾の学年	能力試験	兄弟姉妹間の会話	親同士の会話	出生地
A1	男	高校 2 年	1 級	中＞日	英語	台湾
A2	男	中学 1 年	3 級	中＞日	英語	台湾
B1	男	中学 1 年	2 級	日本語	日本語	日本
C1	女	中学 1 年	2 級	中＞日	中国語	台湾
D1	男	小学 6 年	2 級	なし	中国語	台湾
E1＊	女	小学 5 年	－	両方	日本語	日本
E2	女	小学 4 年	－	両方	日本語	日本
E3	女	小学 3 年	－	両方	日本語	日本
B2	男	小学 2 年	－	日本語	日本語	日本
C2	女	小学 2 年	－	中＞日	中国語	台湾

アルファベットが同じ対象者は兄弟姉妹で、数字は兄弟姉妹の上からの順番を表している。つまり、A1 と A2 は兄弟で、A1 は兄、A2 は弟である。インタビューの時点では、E1、E2、E3 の姉妹が台北日本語授業校を退学しているほかは、全員授業校に在籍中である。

学年は台湾の学校での学年である。＊の E1 は小学 2 年生まで日本の学校に通っていて、来台した時に一年学年を下げて台湾の小学校に編入したため、実際は台湾では小学 6 年生の年齢である。

兄弟姉妹間の会話について、「中＞日」はどちらも使うが中国語の方が多いという意味で、「両方」はどちらが多いともいえないということを表している。E1、E2、E3 は 3 人姉妹で、母親から見ると、姉妹の日中二言語能力の割合は、E1 は日本の学校に二年間通っていたため日本語が強く、E2 はどちらも同じくらい、E3 は中国語が強いというようなグラデーションを成しているため、姉妹間でも相手や状況によってどちらの言語を使用するかは一定ではないという。

日本人の母親は全員日常生活に不自由しないレベルかそれ以上の

中国語を習得しているが、母親の中国語能力に関わらず、対象者たちは幼児期から母親との会話は日本語を使用している。日本語ができる台湾人の父とは日本語で話すこともある。両親の間では、台湾人の父が日本語ができる場合は日本語、そうでない場合は中国語や英語が使用されている。B1 と B2 の兄弟の家庭では、家族間で日本語のみを使用している。

台湾語については、簡単なやり取りができる A1 を除く全員がほとんどできないということである。

日本語能力試験については、インタビューを行った時点で既に合格している対象者のみ表に入れた。

③方法

同じ日に OBC を日本語と中国語の二言語で行った。日本語は筆者が行い、日本語の文字化資料中では JJ となっている。中国語は、日本の大学院で日本語教育を専攻し、現在台湾の大学で日本語教育に携わっている中国語母語話者の台湾人女性に依頼した。

インタビューは対象者の母親の同伴のもと、指定された場所で行い、対象者とその保護者の許可を得て、録画と録音を行った。それぞれコーヒーショップでインタビューを行ったが、その際周囲の声で対象者の発話が聞き取れなかったり録音できなくなったりしないように配慮した。

インタビューは時間や対象者の反応や状況を考慮して臨機応変にタスクを選んだため、全員が同じタスクをしたわけではない。また、日本語と中国語で重複していないタスクもある。導入会話と認知タスクの中の「お話」のタスクは全員に対して行った。タスクの一覧を表 2 に示す。

『』は使用したカード、内容はそれぞれのカードを見ながら話した内容の一例である。

表 2　タスク一覧

タイプ	使用カード	内容
導入（ウォーミングアップ）	『語彙』	挨拶 誕生日 家族 学校生活 名詞・動詞・形容詞
基礎	『部屋』 『スポーツ』 『教室』 『日課』 『職業』 『許可』 『季節』	部屋にある物やその位置 スポーツの種類や経験 教師の指示 一日の生活 将来就きたい職業 トイレに行きたい時許可を得る 季節について
対話	『頼む』 『誘う』 『問合わせ』 『ねだる』 『伝言』 『謝る』	隣の子に文房具を借りる 友だちを誕生日会に誘う 公共機関に問合わせる 親に欲しいものをねだる 親の留守中に来た電話の伝言をする 花瓶を壊したことを謝る
認知	『お話』 『公害』 『地震』 『消化』 『交通安全』	小さい子にお話をして聞かせる 公害の原因と対策 地震への対処方法 消化の仕組み 自転車に乗るときに注意すること

これらのインタビューの文字化資料を分析の材料とし、それぞれの対象者の発話データについて、誤りと見られる箇所を拾い出して分類した。この作業は筆者の外に、日本で日本語教師の資格を取得して台湾でも日本語教育に携わっている成人の女性日本語母語話者にも依頼し、二人が行った。誤りを分類する際には「語彙」「文法」「語用」の 3 種類に分類することを試みたが、それぞれの区別が困難であったため、最終的には文法面での誤りである「文法」と意味は通じるが日本語としては不自然な「表現」の二種類に分類した。

中国語の発話データも同様の手続きを行ったが、本稿では参考程度の使用に止める。また、この OBC は各タスクの達成度に応じて点数をつけた評価ができるが、本研究は対象者の日本語能力を測定するのが目的ではなく、「どのような日本語を話すのか」ということに着目するため、点数化は行わなかった。

四、結果

本章では、OBC インタビューから得られたデータについて、中島他（2000:11）で JHL の特徴として指摘されている、(a) 二言語間の流動性、(b) 最小限の言葉での意志伝達、(c) トピックによる正確度の違い、(d) 二言語の混用　の 4 つの観点から分析する。

なお、本稿は日中バイリンガル国際児の日本語の特徴を概観することを目的としているため、個々の誤りに関する詳細な分析は別稿に譲ることにする。

（a）二言語間の流動性

すべての対象者が協力的な態度でインタビューに臨み、受け答えによどみがなく、日本語の誤りはあるものの、どのタスクも概ね達成することができた。

中島他（2000:11）で指摘されている二言語の混用も見られない。インタビュー中、対象者が日本語がわからずに困ることはほとんどなかったが、認知タスクの「お話」で「3 匹のこぶた」を選んだ対象者 6 名のうち、A2（中 1 男）、D1（小 6 男）、E2（小 4 女）の 3 名が「レンガ」という単語が出てこなかった。この時、中国語を使用したのは A2 の一例のみで、他のは「えーっと」を繰り返してわからないサインを出したり（E2、例 1)、別の言葉で描写したり助けを求めたりする（D1、例 2）というストラテジーを使用していた。

｛例 3｝の A2 も「水泥」という中国語の単語を使ってはいるが、それまでに「コンクリート」（実際は「レンガ」が正しい）という単語を一生懸命に思い出そうとしている努力が窺える。

｛例 1：E2（小 4 女）認知タスク「3 匹のこぶた」の話｝

E2：（略）そして第 3 番目は、えーと・・・とても頑丈なお家をつくるために、えーと・・んーと何を借りた？えーと、お家をつくる材料は、えーと、何を言うんだっけ・・・えーと・・・

JJ：材料？

E2：材料は・・・・えーっと・・・

JJ：レンガかな？

E2：レンガ。レンガを、あの、人から借りて作、お家を作りました。

{例 2：D1（小 6 男）認知タスク「3 匹のこぶた」の話}

D1：（略）えっと一つ目の豚は、ある日、えっと狼が来て一匹目の豚を食べようと思って、えっと一確か稲かな、何でつくった？･･･じゃ､草でつくった家を吹いて一匹目の豚も食べそうになった｡(中略)で､3 匹目の豚は確かブロックで、え？え？何で作ったんだっけ？たしか・・・(舌打ち）え？どうやっていうかわからない。えっと、あの、赤いヤツ、（つぶやく）日本語で、何ていうか知らない。（JJ に向かって強く）日本語でどうやって言うか知らないんだけど。

JJ：レンガ？

D1：あ、レンガか。作った家で、えっと、えっと、今度は狼がど、どう吹いても倒れないから、上の煙突から入ろうとした。

{例 3：A2（中 1 男）認知タスク「3 匹のこぶた」の話}

A2：（略）で、最後に、う、一番上のおにいちゃんと二番目のおにいちゃんがこぶ、いじばん小さい子豚の家に入った、あの豚の家は、えっと、コン、コ、えーっと、コン、・・・えーっと､・・・えーっと､ことりる？え？し､しらん・・・えー､・・・(JJ に向かって）あの､「水泥」は何ていうの？「水泥」。

JJ：ああ、コンクリート。

A2：あ、コンクリートの作った家にみんなが入って、で、狼がまた来て、（後略）

（b）最小限の言葉での意志伝達

A2（中 1 男）と C2（小 2 女）、E3（小 2 女）の 3 人は最低限の言葉での答えが目立つ。

反対に A1（高 1 男）、B1（中 1 男）、C1（中 1 女）、D1（小 6 男）は質問に対して常に単語ではなく文で答えていた。A1（高 1 男）は一貫して流暢な敬体の文で話し、質問に対する付加情報も多く、非常に高度な日本語が話せるという印象を受ける。

B1（中 1 男）B2（小 2 男）の兄弟と E1（小 5 女）E2（小 3 女）の姉妹も付加情報が多い。B1 と B2 兄弟、E1 と E2 と E3 の 3 姉妹は、それぞれの父親も日本語ができるので、母親だけでなく家族間の会話に日本語が使用される機会が多いため、日本語での会話に慣れていることが一因として考えられる。

しかし、これらの違いは中国語の発話データにおいても同様の傾向が見られることから、JHL の特徴だとは言いかねる。寧ろ、子どもの性格によるところが大きいのではないかというのがそれぞれの母親の話である。

（c）トピックによる正確度の違い

OBC のインタビューでは、ウォーミングアップと導入質問の後、「基礎タスク」「対話タスク」「認知タスク」の 3 つのタスクがある。「基礎タスク」は主に日常生活に関連する名詞、形容詞、動詞に関する質問で、「対話タスク」は家庭生活、学校生活、社会生活で起こりうる場面のロールプレイ、「認知タスク」ではお話や自然、社会に関連するトピックについて、主に一人で物語を話したり、論理的に説明することが要求されている。

前述したように、中島他（2000）では、「JHL では日常茶飯事の範囲の会話はスムーズであるが、概念的、抽象的トピックになると、語愛が不足し、段落がまとまらないことも多い。また一見流暢に話しているようでも助詞の脱落、L2 との干渉、文体の不一致などの問

題を抱えている。」（中島他, 2000:11）と述べられている。

これらのタスクの違いによって正確度は異なるのであろうか。以下で主に①文法、②中国語の干渉、③文体の不一致、④その他の 4 点について検討する。

①文法

各対象者の文法上の誤りを表 3 に示す。表中の【】はタスクのタイプで【基】は基礎タスク、【対】は対話タスク、【認】は認知タスクである。文中の＿＿＿は文法上の誤りの箇所で、……は文法以外での誤りの箇所を示している。

表 3　各対象者の発話中の文法上の誤り

	品詞	
A1 高 2 男	助詞	(ⅰ)【基】5 時ぐらいまで授業を（が）続いて (ⅱ)【基】15 分ぐらいに家出て、まあ 20 分ぐらいで（に）着いて (ⅲ)【認】昔々に、3 匹のこぶたがいました。
	動詞	(ⅳ)【認】こぶたは下で、熱いお湯を沸いてて（沸かしていて）
A2 中 1 男	助詞	(ⅰ)【基】5 分か（から）10 分 (ⅱ)【基】ゲームを（で）遊ぶ（＊or ゲームをする） (ⅲ)【基】4 時まで（に）勉強終わって (ⅳ)【対】JJ:友だちを呼んで？ A2:うん、家まで（に） (ⅴ)【対】あれ、おにいちゃんの｛だ｝けど (ⅵ)【認】幸せで（に）生活しました。 (ⅶ)【認】コンクリートの（で）造った家に皆が入って
	動詞	(ⅷ)【基】熱いものをさめ、さめ、さめましてる（さましてる）。
	助動詞	(ⅸ)【認】わらの家が倒れてしました、てしました。（倒れてしまいました）
B1 中 1 男	助動詞	(ⅰ)【基】おじいちゃんに黄昏市場に連れて行って（連れて行ってもらって）さ、飴のところがあって
C1 中 1 女	助詞	(ⅰ)【認】その様子を狼を（が）見て、これはうまいぞ、と思いました。
D1 小 6 男	助詞	(ⅰ)【基】6 時 50 分に起きて 7 時から（に）ご飯食べる。 (ⅱ)【対】テレビの中に（の／で）キャラクターも動くから (ⅲ)【対】家に（で）お母さんに遊ばせてもいいんじゃないかな。 (ⅳ)【対】未来にお金、お金をた、ためないと。 (ⅴ)【認】ガスとかガソリンとかこういうの変な煙とか出して
E1 小 5 女	助詞	(ⅰ)【対】JJ さんが（から）電話あったって。
E2 小 4 女	助詞	(ⅰ)【認】お家を作る材料は、えーと、何を（と／て）言うんだっけ？

	動詞	(ⅱ)【対】さっき、JJ さんって言う人から電話がかかりました。(かかってきました。) (ⅲ)【認】そして 3 人で遊んでいる時は、狼がさ、みえ、狼がその 3 人のこぶたを見えました。(見かけました)。
E3 小 2 女	助詞	(ⅰ)【基】ボールを (で) 遊んだり、ローラーブレード。(＊or ボール遊びをしたり) (ⅱ)【対】お誕生日パーティーを (に) 呼んで、あの、一緒にケーキを食べる。 (ⅲ)【対】おじいちゃんとおばあちゃんが (から) 電話来る時に電話に出る。 (ⅳ)【認】3 匹のこぶたのお家を (に) 行きました。
	動詞	(ⅴ)【対】JJ:あのー、M さんいらっしゃいますか。 E3:います。 (ⅵ)【認】狼が目を回って (回して)、そして屋根から入ろうと思ってたら (ⅶ)【認】神様に地球の病気をなお、なお、なおるために (なおしてくれるように) って、お祈りします。
B2 小 2 男	助詞	(ⅰ)【基】7 時半から (に) 出発して、だいたい 5 分ぐらいで学校に着く。 (ⅱ)【認】ユニセフから (が環境汚染から) 守る。
	動詞	(ⅲ)【認】ドラえもんが先にゴツーン！って引き出しから出て、(中略) 四次元ポケットから何か出て (出して)、びっくりして助けてくれて
C2 小 2 女	動詞	(ⅰ)【対】野球してたとき、ボールがぶつっちゃった。(ぶつかっちゃった)

表 3 からわかるように、文法の誤りの大部分は助詞が占めており、8 人による 24 例がある。

特に、「を」の多用と時間や時刻を表す助詞の使用の誤りが目立ち、それぞれ 5 人の 7 例が見られた。

「を」の多用による誤り：

・5 時ぐらいまで授業を (が) 続いて[A1(ⅰ)]

・ゲームを (で) 遊ぶ」[A2(ⅱ)]

・狼を (が) 見て[C1(ⅰ)]

・何を (と／て) いうんだっけ？[E2(ⅰ)]

・ボールを (で) 遊んだり[E3(ⅰ)]

・お誕生日パーティーを (に) 呼んで[E3(ⅱ)]

・お家を (に) 行きました[E3(ⅲ)]

時間や時刻を表す助詞の誤り：

・20 分ぐらいで (に) ついて[A1(ⅱ)]

・昔々に[A1(ⅲ)]

・5 分か（から）10 分[A2(ⅰ)]

・4 時まで（に）勉強終わって[A2(ⅲ)]

・7 時から（に）ご飯食べる[D1(ⅰ)]

・未来に[D1(ⅳ)]

・7 時半から（に）出発して[B2(ⅰ)]

自他動詞の誤り：

・お湯を沸いてて（沸かしていて）[A1(ⅳ)]

・熱いものをさめましている（さましている）[A2(ⅷ)]

・狼が目を回って（回して）[E3(ⅵ)]

・病気をなおる（なおす）[E3(ⅶ)]

・ドラえもんが四次元ポケットから何か出て（出して）[B2(ⅲ)]

動詞に関する誤りの 6 人 9 例のうち、4 人 5 例が自動詞と他動詞に関する誤りであり、すべて本来他動詞を使用すべきところが自動詞になっている点が興味深い。

伊藤（1990）では、幼児が言語を習得する際には自動詞の習得が他動詞に先立ち、自動詞的表現の他動詞への代用は、個人差もあるが 5、6 歳まで続くとされている（伊藤, 1990:70）。本データ中のこの誤りは小学 2 年生から高校 2 年生という年齢の幅があるが、年齢に関わらず残りやすい誤りのパターンであるのか、自他動詞の逆のパターンはあるのか、今後更にデータを収集し、検討してきたい。

②中国語の干渉

前述したように、日本語の発話の中で中国語を使用することはなかったが、中国語の干渉だと思われる日本語としては不自然な語彙や表現が見られた。

（イ）それで狼が来たらどんな方法でも入れないで、なんか、えーと煙突があったのかな？煙突の中から入ろうとしました。{不管是怎麼吹或是怎麼踢}

（ロ）ゲームを（で）遊ぶ。{玩遊戲}［A2【基礎】］

（ハ）JJ：A2 くんは、今何かほしいものがありますか。

A2：コンピューター。

JJ：コンピューター。その時はどうするんですか。
A2：パパとあのー教えて、買ってくださいって。
｛跟爸爸說請買給我｝［A2【対話】］

（ニ）ある、赤、赤い頭巾をかぶった女の子がいました。彼女は、おばあさんのお見舞いのために、森の奥にあるおばあちゃんの家に行きました。｛有一個戴紅帽的女孩子，她到森林裡的奶奶家探病｝［C1【認知】］

（ホ）未来｛に｝お金、お金をためないと。｛爲了未來，要存錢｝［D1【対話】］

（ヘ）政治の人物とかも遊んでいる。｛政治人物也在玩的｝［D1【対話】］

（ト）なんか、JJ さんがなにか、なにかお母さん、ママを探してるから、お電話、し、しなって。｛她要找媽媽｝［D1【対話】］

（チ）第一番目の豚のお兄ちゃんは｛第一個哥哥｝［E2【認知】］

（リ）公園の中で、さ、さくらの木がとてもきれいでした。｛在公園裡｝［E2【基礎】］

（ヌ）JJ：昨日は何時に寝ましたか。
C2：もうすぐ 11 時［C2【基礎】］｛快十一點｝

（ル）JJ：じゃ、ほしいものがあったら、いつもどうしてる？
C2：ママとほしがってる。｛跟媽媽要｝［C2【対話】］

（ヲ）一番おっきい子豚が、二番大きい子豚のお家に行きました。そして、狼が、二番のこ、子豚のおうちを…。｛第二個｝［E3【認知】］

（ワ）JJ：誰かから電話あった？
E3：はい。
JJ：なんて？
E3：えっとう、お母さんをさが、すんです。｛她要找媽媽｝［E3【対話】］

単語レベルでの干渉が多いが、（ロ）と（ヌ）、（ヘ）と（ヲ）、のように、二言語に同じ意味の動詞として存在していてもそれぞれ意味的使用範囲の異なる動詞に関わる干渉もある。服部（2007）の 6 歳の国際児の日本語データからも「歯が抜ける」を「歯が落ちる」｛牙齒掉了｝、「糸が切れる」を「線が折れる」｛線斷了｝となる発話例が見られた。これらの誤りは中国語を母語とする成人日本語学習

者にもよく見受けられるが、今後他にもどのような表現で誤りやすいのかを更に調べていく必要がある。

③文体

インタビュー中、筆者は質問をする時には基本的に敬体を用いたが、対象者が年少者であるため極度な緊張を与えないようにすることを考慮して常体を使うこともあった。これに対し、A1、C1、E1と E2 は終始敬体の文での受け答えができていた。これらの対象者が一人を除くと小学高学年以上であり、この年齢に達するとかなりフォーマルとインフォーマルの使い分けができるものと思われる。B1 と C1 についてはインタビューを行った筆者とは授業校で顔を合わせることが多いため、その気軽さからインフォーマルな文体が多くなったと考えられる。

そのため、このインタビューからは文体の統一性の有無を検証することはできない結果となった。今後インタビューの方法に工夫する必要がある。

④その他

<u>複文における誤り</u>

前述したように、最低限の言葉や頷いたり首を振ったりするだけの答えもあるが、どの対象者も日本語での受け答えは流暢であった。しかし、その多くは単文であり、複文になると｛例 4｝から｛例 8｝のように、文のねじれが観察された。

｛例 4：A1（高 2 男）認知タスク「お話」｝

次男の子豚はぶらぶら<u>歩いて</u>、木が見えました。｛次男の子豚がぶらぶら<u>歩いていると／いたら</u>、｝

｛例 5：A2（中 1 男）対話タスク「誕生日会に友だちを誘う」｝

あのー、何、何月何日は僕の誕生日<u>で</u>、来てください。｛なので｝

｛例 6：A2（中 1 男）認知タスク「お話」｝

3 匹の子豚のお母さんは、自分で生き、あの、<u>自分で生活してみたら</u>、3 匹の子豚が外に行って暮らしてみました。｛自分で生活してみたら、と言ったので｝

｛例 7：D1（小 6 男）対話タスク「伝言」｝

JJ：どうして小学校の 1，2 年生の先生になりたいの？

D1：一番最初から、ちゃんと、えっとすきち、えっと、えっと、賢くさせる。で、いい方法。結構 1，2 年生の成長も早いから。｛結構 1，2 年生の成長も早いから、一番最初からいい方法でちゃんと賢くさせる。｝

｛例 8：D1（小 6 男）対話タスク「伝言」｝

JJ：ただいま。

D1：なんか JJ さんがなにか、なにかお母さん、ママを探してるから、お電話、し、しなって、お電話でもしたらって言ったんだけど。｛JJ さんから電話があって、後でまた電話しますって言ってたんだけど。｝

また、A2 は複文中での格助詞「と」の誤用が目立つ。D1 にも一例見られた。

｛例 9：格助詞「と」の誤用例｝

・皿を置くと、ちょっと切るか、あのものを、ちょっと物を、きゅうりとかを小さく切る。（A2【基礎】）
・宿題と、本と、テレビと、ゲームを遊ぶ。（A2【基礎】）
・6 時 45 分に起きて、朝ごはんと洋服を換えて（A2【基礎】）
・木を切りすぎて二酸化炭素が多すぎる、と、工場が黒い煙を出して、えっと地球を破壊してる。（A2【認知】）
・もっと木を植えると、車は検査に行って、あの、黒い煙をださないように。（A2【認知】）
・今 wii がはやってるから、僕も遊びたくて、と、お母さんもついでにダイエットできるから、ほしいなぁ。（D1【対話】）

これらの誤りは比較的年齢が高い対象者に見られているが、しかし、中島他（2000:11）で指摘されているように、これを彼らの言語的挫折と判断するのは早急であろう。低学年の対象者の誤りが少ないのは、発話量が全体的に少なく、単文の使用も多いためでもある。

それだけ高学年の対象者がより難易度の高い日本語で話していることの表れでもあると言えるのではないだろうか。

また、B1 と B2 の兄弟、E1 と E2 と E3 の姉妹のうちの E1 と E2 は発話量の多さに比して誤りが非常に少ないのは、母と子の間に限

らず家族間で日本語を使用していること、それぞれ第一子が日本で1年ないし2年の就学経験があること、夏休みには長期間母の日本の実家で過ごし、日本語のみの環境に触れる機会が多いという家庭環境の影響があると思われる。

家庭内で母と子だけで日本語を使用していると、込み入ったことをわざわざ説明しなくても通じる状況が多い。意識して複雑な文で話させる習慣をつければ改善できるかもしれない。

日常生活であまり行わないタスク

「伝言」のように日常生活であまり行われない言語行動に関するタスクが難しかったのは{例8}のD1だけではない。このタスクはA1を除く全員に行ったが、敬語の使用や伝言のしかたなど、主に低学年の対象者に不慣れな様子が見られた。反対に、留守番をすることがよくあるというE1は、この二点にも問題なくタスクが達成できていた。

これは、主に低学年の対象者は自分が一人で留守番をする経験がなかったり、こうした状況があっても日本語での電話ではなかったり、そして何よりも携帯電話の普及により、電話の伝言をすること自体が少なくなっていることとも関係しているであろう。

{例11：C1（中1女）対話タスク「伝言」}

JJ：あの、Mさんいらっしゃいますか。

C1：今、在、在宅？在宅。今お出かけ･･･今、在宅じゃありません。

JJ：ああー、じゃ、何時ごろ帰ってらっしゃいますか。

C1：予想がつきません。予想がつきません。

{例12：E2（小4女）対話タスク「伝言」}

E2：おかえりなさーい。あの、きょ、さっきさ、JJさんっていう人から電話がかかりました。またでん、でんわしてくださいって、たの、あのーお願い･･･。

{例13：B2（小2男）対話タスク「伝言」}

JJ：あのー、Sさんいらっしゃいますか。

B2：いらっしゃいません。

JJ：えーと、じゃ、何時ごろ帰っていらっしゃいますか。

B2：何時でもいいけど･･･。

JJ：うーんと、じゃあ、お母さん帰ったら、あのーまた電話しますってお伝えください。

B2：ああ。

JJ：じゃ、失礼します。

B2：また後でね。

（中略）

JJ：なんて？

B2：帰ったら、また、誰か電話するって。

JJ：あ、誰か電話するって言ってたんだ。（笑）

B2：また誰か電話するって。

｛例 14：C2（小 2 女）対話タスク「伝言」｝

JJ：あの、おかあさん、M さんいらっしゃいますか？

C2：出かけちゃいました。

こうした言語行動のほかに、知識不足や言語能力不足というよりは自分が考えていないことについてはタスクの達成が難しかったようだ。認知タスクの「公害」は、対象者がどのようにしたら公害を防ぎ、地球を守ることができるかということについて話すタスクである。

これについては、日本語においても中国語においても「木を切らないようにする」「排気ガスを出さないようにする」など絵に描いてあることそのまま言う対象者がほとんどであった。

母の影響

父親が日本語ができる家庭でも、対象者にとっては母親が最も接触量の多い日本語母語話者である。そのため、対象者の日本語に母親の影響が見られることがあった。一つは B1 の方言、もう一つは D1 の「ご本を読んでる」「お家で仕事してる」である。後者については服部（2005）でも、「高学年以上の男の子が『おズボン』って言うのは変だ。」「『～なのよね。』という言い方を息子がするので、あえて女性らしくない言葉を使うように心がけていた。」という母親の

話があった。男の子と母親との間で日本語を使用している場合には、子どもの成長に合わせて女性のような表現にならないように気をつける必要がある。

（d）二言語の混用

日本語の文中で中国語の単語が混じるというような二言語の混用はどの対象者にも全く見られなかった。普段から意識して日本語を使用している結果であろう。

以上、対象者 10 人の日本語の発話データについて（a）～（d）のような JHL の特徴があるのかどうかを検証してきた。

注意すべきは、このインタビュー中で誤りが多いことと日本語能力の高低とをそのまま結びつけることはできないという点である。誤りがほとんど見られなかった B1（中 1 男）、C1（中 1 女）、E1（小 5 女）、C2（小 2 女）のうち、高学年である前者の三人は積極的に話す中にも誤りが少ない。しかし、低学年の C2 はインタビューに最低限の言葉で答える傾向にあり、発話量自体が少ない。そのためか、助詞の使用の誤りが見られていない。逆に A1（高 2 男）と D1（小 6 男）は質問に対して積極的に答えてくれて発話量そのものが多かったため、誤りが表出化しやすかったものと考えられる。

五、考察

前章では本研究の対象者である日中バイリンガル国際児の JHL の話し言葉には、中島他（2000）で指摘されているような特徴が見られるのか検証した。

その結果、（a）日本語でうまく表現できないと中国語に切り替える、（d）日本語の文の中に中国語を混用することは単語レベルでも文レベルでも見られなかった。日本語の単語が思いつかないときは、他の言葉で言い換えたり説明を加えたり、わからないというサインを出して助けを求めるストラテジーが使用されていた。

（b）最小限の言葉で意志伝達ができるように「単語レベルの応答」「未完成文」の使用が多い、（c）日常茶飯事の範囲の会話はスムーズであるが、概念的、抽象的トピックになると、語彙が不足し、段落がまとまらないことが多く、流暢に見えている発話の中に助詞の脱落や L2 の干渉、文体の不一致の問題などがある、の二項目につ

いては本データ中でも同様の傾向が見られた。

（b）については、年齢的要因と性格的要因の影響が大きいと考えられるため、発話量の多少で日本語能力を判断するのは難しい。中島他が指摘しているように、単語レベルの会話をしていると言っても単語レベル以上の言語能力がある可能性も考えられる。

（c）は中島他の挙げる特徴とほぼ合致しているが、次のようにまとめることができる。

①文法

発話データから得られた文法上の誤りは、「助詞」「動詞」「助動詞」で、とくに「助詞」と「動詞」が多かった。「助詞」については格助詞「を」の多用が目立った。「動詞」はその大部分は自他動詞に関わるもので、他動詞を使用すべきところを「自動詞」が使われていた。このことと幼児が自動詞を先に習得する先行研究（伊藤, 1990）と関係があるのか、今後の更なるデータ収集から検証したい。

他の品詞について誤りがないのかと言えばそういうわけではないだろう。より広い範囲の発話が引き出せるようなトピックや質問の方法を検討する必要がある。

②中国語の干渉

発話データからは単語レベルの干渉が多くみられるが、「JJ さんがママを探している（JJ さんからママさんに電話があった）｛JJ 要找媽媽｝「ママとほしがっている（ママにお願いする）｛跟媽媽要｝というような、同じ意味の動詞ではあるが、その意味的使用範囲の違いによる中国語の干渉もある。こうした誤りは 6 歳児の OBC データからも検出されている。また、中国語を母語とする成人日本語学習者の日本語の発話や作文にもよく見られる誤用である。JHL、JFL に関係なく中国語母語話者が誤りやすい動詞や表現のタイプをこうして明らかにしていくことは両者の日本語学習に有益となるであろう。

③文体

小学高学年以上の対象者は終始敬体で話すことが多かったが、これはインタビューに際して指示もしておらず、またインタビューを

行った筆者が対象者と面識があったため、敬語を使用する意識が欠如していた可能性もある。

④その他－複文における誤り・日常生活で経験しないタスク・母の影響

単文での発話では誤りが見られないが、複文になると文がねじれたり、文の接続が不適切になったりする。高学年以上の対象者にこうした傾向がみられた。年齢が上がるにつれてこうした誤りはなくなっていくと考えがちであるので意外であった。これは低学年に誤りがないのではなく、高学年の発話には付加情報が多く、高度な日本語を使用しているなど、発話の質と量が異なるためである。

年齢が上がるにつれて、その話す内容も複雑になる。それに合わせてを正しい文型を使用して発話できるようにするためには家庭内の会話でも意識する必要があろう。

日常生活で経験することが少ないタスクについては達成度が低かった。「電話の伝言」は現在の携帯電話の普及から少なくなっている言語行動の一つであるが、その際の敬語の使用も不適切であることが多い。

更に男の子の場合は、母子間で日本語を使用する際は、男の子の言葉が女性言葉にならないように気をつける必要もあるようだ。

以上、誤りが起こりやすいのは「助詞」「動詞」「助動詞」で、複文の接続でもねじれが起こりやすい。中国語の干渉は単語レベルでも文レベルでも起きる。こうした誤りは、より複雑な内容を話すときと日常生活で経験することがあまりないタスクで表出しやすい。

これらは日本語と中国語で共通していない文法項目は習得しにくく、日本語では「助詞」「動詞」「敬語」「助動詞」「機能語」がそれに該当するいう李（2006;136）の指摘に合致している。

しかしながら、10 人のデータではどの対象者にも共通する誤りというのは実際にはなく、誤りの種類と年齢の大きな関わりはみられず、その個性と同様に日本語の誤りの傾向もさまざまであった。中島（1998b）や Yamamoto（2001）でも述べられているように、こう

すれば必ずバイリンガルに育てることができるという絶対的な方法は存在しないことを示唆しているとも言えよう。

従って、子どもの成長を見守る周囲の大人も、子どもの日本語のケアに際しては、その子どもの性格や生活、環境、年齢に合わせて日本語習得の手助けを行うことが大切だと思われる。

今後更に多くのデータを収集することによって、より客観的な分析を行い、日台バイリンガル児の日本語の様相を明らかにしていきたい。

六、まとめと課題

両親の母語が異なる国際結婚家庭の子ども（以下、「国際児」）は自然かつ同時にその二言語を習得すると思われることが多いが、実際は必ずしもそうではないことが、これまでの研究で報告されている（Yamamoto, 2001:1）。

また、幼児期のバイリンガルが将来のバイリンガルを保障するものではなく、特に居住社会で広く使われていない非主流言語について、年齢に相応した能力を子どもが習得するには、親の多大な努力が必要とされている（中島, 1998a; 山本,1999; 湯川, 2000）。

バイリンガルは自然に育つものではなく、育てるものだということがいえる。

しかし、この個人の心理的要因が、二言語の習得と保持に大きく関わっていることが李（2006）で示唆されているように、親や周りの人がどんなに力を入れても、どんな環境にあっても最終的には本人次第である。

今回のデータは年齢に幅のある対象者について、限られた時間と内容でのインタビューをデータとしたため、日中バイリンガル児の日本語の話し言葉の実態を解明するには限りがあり、残された課題は少なくない。今後は対象者のより広い範囲の言語データを収集できるように、インタビューの内容と方法についても更に検討を加える余地がある。日中バイリンガルの誤りの中には成人日本語学習者

に共通する誤りも少なくない。JHL と JFL 双方の日本語教育に役立つことができるよう、こうしたメカニズムの解明に力を注いでいきたい。

参考文献

Bialystock, E. (1991) Metalinguistic dimensions of bilingual language proficiency. In E.Bialystock(Ed.), *Language processing in bilingual children*. Cambridge University Press.

服部美貴（2005）「台湾在住の日台婚姻家庭における子どもの日本語習得に関する基礎的研究」『台湾日本語教育論文集 第九号』p.251-282 台湾日本語教育学会

服部美貴（2007）「日台国際児の日中二言語会話力－6 歳児の OBC から－」『2007 年台大日本語文創新国際学術研討会論文集』p.223-242 台湾大学日文系

伊藤克敏（1990）『こどものことば』

李美静（2006）『中日二言語のバイリンガリズム』風間書房

中島和子（1998a）『言葉と教育』海外子女教育財団

中島和子（1998b）『バイリンガル教育の方法－12 歳までに親と教師ができること』アルク

中島和子他（2000）『子どもの会話力の見方と評価－バイリンガル会話テスト（OBC）の開発―』カナダ日本語教育振興会

Okita, T. (2002), *Invisible Work*, John Benjamins Publishing Company

竹下修子（2004）『国際結婚の諸相』学文社

山本雅代（1991）『バイリンガル－その実像と問題点－』大修館書店

山本雅代（1996）『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』明石書店

山本雅代編（1999）『バイリンガルの世界』大修館書店

湯川笑子（2000）『バイリンガルを育てる 0 歳児からの英語教育』くろしお出版

Yamamoto, M. (2001), *Language Use in Interlingual Families: A*

Japanese-English Sociolinguistic Study. Multilingual Matters

Yukawa, E. (1998), *L1 Japanese Attrition and Regaining Three case studies of two early bilingual children*, くろしお出版